

指導資料

鹿児島県総合教育センター
平成31年4月発行

社会 第132号

対象
校種

小学校 中学校 義務教育学校
特別支援学校

知識の理解の質を高める社会科の授業改善 —新たな視点の「問い」の設定を通して—

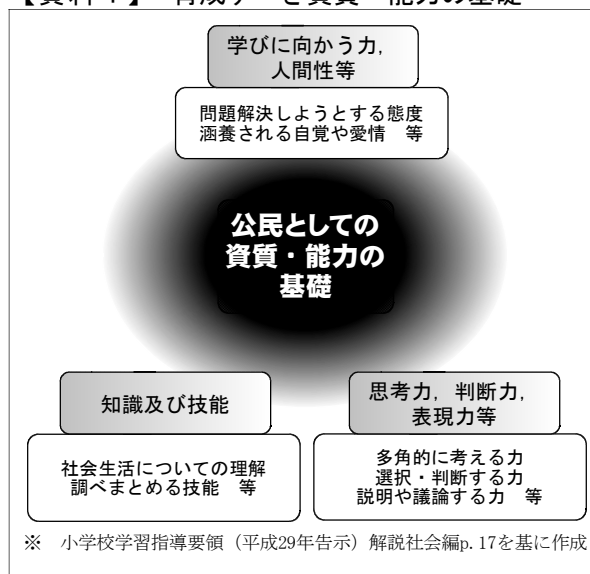
新学習指導要領では、資質・能力を育成するために、知識の理解の質を高めることを改訂の基本的な考え方としている。知識の理解の質を高める社会科の授業改善について、社会的な見方・考え方を働かせた新たな視点の「問い」を切り口にしてポイントを述べる。

1 知識の理解の質を高める社会科授業

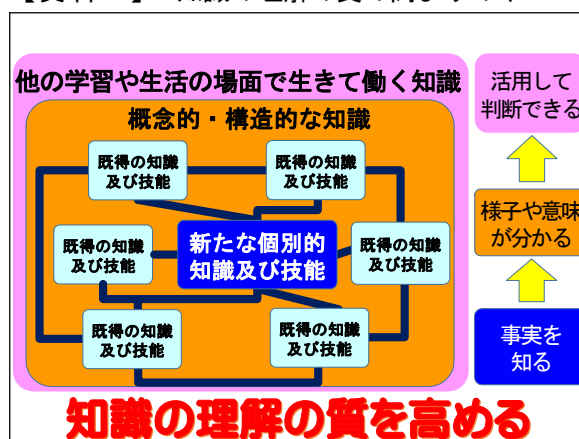
平成29年3月の学習指導要領改訂では、児童生徒がどのような資質・能力を身に付けるかというコンピテンシーベースを軸に、目標と内容に一貫性をもたせる形で編成が進められた。小学校社会科の教科目標を例に挙げると、「公民としての資質・能力の基礎」を育成することを柱書に明記した上で、その基礎となる資質・能力として、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱で整理された（資料1）。この資質・能力を一体的に育成するポイントは、知識の理解の質を高めることにある。

知識の理解の質を高めるとは、資料2に示すように、事実に関わる個別的な知識及び技能が、既得の知識及び技能と関連付けられながら、概念的な知識に高まり、他の学習や生活の場面でも活用できる確かな知識や技能として生きて働くものとなることである。社会認識の段階で言えば、身近な社会的事象の事実を知る段階から、事象の一般的な傾向や事象間の因果関係など様子や意味が分かる段階、そして、学んだことを活用して判断し、知識を再構成する段階へと高まることと言える。

【資料1】 育成すべき資質・能力の基礎



【資料2】 知識の理解の質の高まりのイメージ



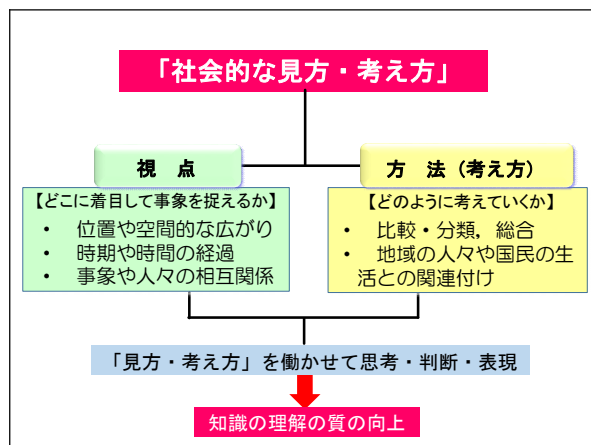
2 社会的な見方・考え方を働かせる「問い」

さらに、社会科の目標には、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動」を通して、資質・能力を育成することが明記された。つまり、課題を追究したり解決したりする活動の中で、社会科ならではの見方・考え方を働かせることで、資質・能力が一体的に育成される授業づくりが求められている。

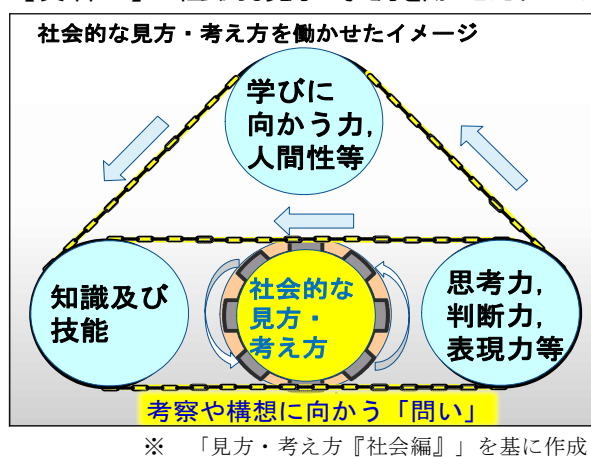
小学校を例に挙げると、「社会的な見方・考え方」は、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して（視点）、社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること（方法）である。そして、「社会的な見方・考え方を働かせる」とは、「視点や方法（考え方）」を用いて事象について調べ、考え、表現して、理解したり、学んだことを社会生活に生かそうとしたりすることであり、その過程で知識の理解の質が高まると考えられる（資料3）。

ここで重要な意義をもつのが「問い」である（資料4）。「問い」は、単に思考を導くものではなく、その「問い」が示唆する視点から事象を捉えたり、他の事象との比較や関連付けを促したりする。例えば、「どのように広がっているか」の「問い」は、分布という空間的な広がりに着目して事象を捉えることを促し、「どのような違いがあるか」の「問い」は、事象間の比較を促すことを意味する。児童生徒は、こうした社会的な見方・考え方である視点や方法を生かした「問い」を基に、社会科ならではの学びを経て、事象の意義や意味を考察したり、課題の解決に向け構想したりし、その結果、様々な知識を獲得するのである。つまり、どのような「問い」を投げ掛けるかによって、児童生徒が働かせる見方・考え方が方向付けられ、事象の理解も決まってくると言える（資料5）。

【資料3】 社会的な見方・考え方（小学校の例）



【資料4】 社会的な見方・考え方を働かせたイメージ



【資料5】 考察や構想に向かう「問い」（中学校の例）

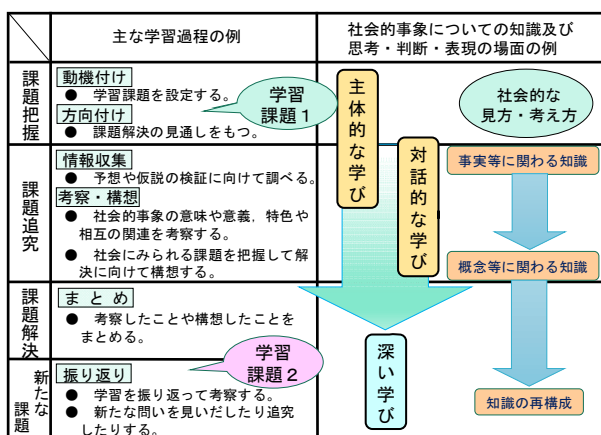
地理的な見方・考え方を働かせた「問い」	
地理的分野	それは、どこに位置するのだろうか それは、どのように分布しているだろうか そこは、どのような場所だろうか など
歴史的な見方・考え方を働かせた「問い」	
歴史的分野	どのような時代だったのだろうか それは、なぜ起こったのだろうか どのような影響を及ぼしたのだろうか など
現代社会の見方・考え方を働かせた「問い」	
公民的分野	なぜ市場経済というしくみがあるのだろうか それは、どのような機能があるのだろうか なぜ法に基づく政治が大切なのだろうか など

3 問題解決的な学習過程の充実

資質・能力を育成するためには、前述のとおり、社会的な見方・考え方を働かせた「問い」を投げ掛けて、課題を追究したり解決したりする問題解決的な学習過程を構想することが重要である。

そのような学習過程として、課題把握、課題追究、課題解決の展開が考えられる。それに加えて、学習を振り返って、新たな課題について考察・構想させることがポイントになる。「問い」（学習課題1）をもち、課題把握し、課題追究していく中で、事実等に関わる知識が概念等に関わる知識となっていく。そして、学習を振り返り、新たな視点の「問い」（学習課題2）を見いだしたり追究したりすることで、更に知識が再構成されて、生きて働く汎用的な知識になり、知識の理解の質が高まっていくからである。

【資料6】 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習過程のイメージ



資料6は、一単位時間の学習過程をイメージしたものであるが、全ての時間に「問い」（学習課題）を二つ設定するというわけではない。新学習指導要領では、「単元等の内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」とある。つまり、単元のまとまりの中で、深い学びの実現を目指す時間に、新たな視点の「問い」の設定を検討していくことが望まれる。

4 新たな視点の「問い」とは

(1) 新たな視点の「問い」を設定する意義

例えば、小学校の工業の学習で「自動車をどのように作っているのだろう」という（学習課題）に対して、輸送、貿易などの内容が

含まれると、この課題の追究だけでは解決しないことがある。そこで、更に学びを深めていくためには、「では、なぜ～はここに集まっているのか」、「Aは～であるのに、Bはなぜ～か」、「これからはどうしたらいいのか」などのように、新たな視点の「問い」が必要になってくる。これまでも、（学習課題2）と設定しなくても、児童生徒を揺さぶる「問い」を駆使して、深い学びを実現していた授業も多く存在する。ここで大切なことは、教師が新たな視点で社会的な事象を捉え直す意識をもつことで、社会科のより深い本質的な学びに迫ることである。

(2) 授業構想シートの活用

資料7は、当センターの研修講座の演習で活用したワークシートである。問題解決的な学習過程の中で、新たな視点の「問い」を設定するためのシートとして活用できる。

【資料7】 授業構想シートの具体案①

研究協議 ワークシート [/] 班

「見方・考え方」を働かせる「問い」を設定した授業をどう構想するか。

学習内容 第5学年「自然災害を防ぐ」

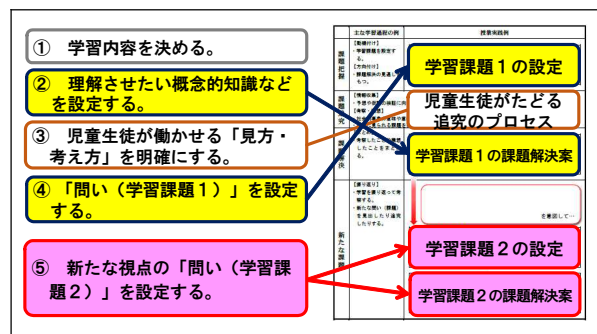
主な学習過程の例	授業実践例
【動機付け】 ・学習課題を設定する。 【方向付け】 ・課題解決の見通しをもつ。	【問い(学習課題1)】 国や地域では、自然災害を防ぐために、どんな取り組みが行われているのだろうか。
【情報収集】 ・予想や仮説の検証に向けて調べる。 【考察・構想】 ・社会的な事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察する。 ・社会にみられる課題を把握して解決に向けて構想する。	施設: 砂防ダム、放水路 備え: 防災訓練 △ 総論
【まとめ】 ・考察したことや構想したことをまとめる。	【学習課題1の課題解決案】 国や地域では、自然災害を防ぐために、防災施設を整備したり、防災に対する備えを行ったりしている。
【振り返り】 ・学習を振り返って考察する。 ・新たな問い(課題)を見出したり追究したりする。	自然災害は備えだけでなく、 主 への対応 発生後の対応も必要であることに気付かせた。 【問い(学習課題2)】 自然災害が発生したときには、国や地域は、どんな取り組みが必要なのだろうか。 を行っているのだろうか。
新たな課題	【学習課題2の課題解決案】 自然災害が発生したときには、国や地域は、国民生活をいち早く守る取り組みを行っている。

資料: 決壊した砂防ダム、仮設住宅
住宅、仮設住宅、食

授業づくりでは、教師はまず単元の指導計画を検討する。そして、その単元のまとまりの中で、深い学びの実現を目指す一単位時間

の学習内容を決める。次に、その時間に理解させたい概念的な知識を設定する。これが、（学習課題1）の解決案となる。そして、その解決に迫るための「問い」を立てるために、児童生徒が働かせる見方・考え方を明確にし、それを「問い」（学習課題1）に落とし込む。最後に新たな視点の「問い」（学習課題2）を設定し、その解決案を構想する（資料8）。

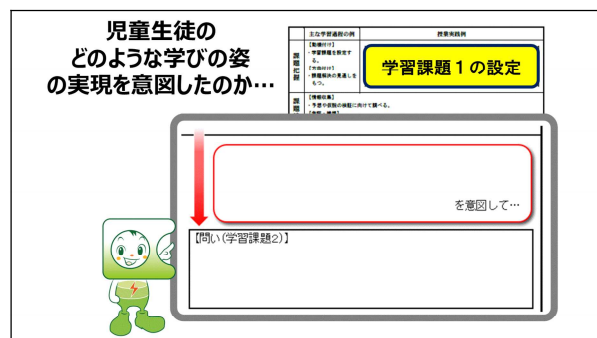
【資料8】 授業構想シートの活用法



(3) 新たな視点の「問い」の立て方

新たな視点の「問い」を立てるポイントは、教師が児童生徒のどのような学びの姿の実現を意図したのかを明確にもつこと（資料9）、そして、（学習課題1）で働かせた社会的な見方・考え方とは別の視点や方法で（学習課題2）を構想することである。

【資料9】 新たな視点の「問い」を立てるポイント



資料10は、前述の資料7と同じ小学校第5学年小单元「自然災害を防ぐ」の中の一単位時間の構想である。資料7は、国や地域ではどのような防災の取組を行っているかを課題解決した後、自然災害への対応は備えだけでなく、発生後の対応も必要であることに気付かせる新たな視点の「問い」（災害前後の時間の経過の視点）を設定している。資料10は、国土の災害を学習したまとめの時間として、

【資料10】 授業構想シートの具体案②

研究協議 ワークシート [3] 班	
「見方・考え方」を働かせる「問い」を設定した授業をどう構想するか。	
学習内容	5年「自然災害を防ぐ」まとめの段階
主な学習過程の例	授業実践例
課題把握 【動機付け】 ・学習課題を設定する。 【方向付け】 ・課題解決の見通しをもつ。	【問い(学習課題1)】 鹿児島県では、どのような防災の取組をしているのだろうか。
課題追究 【情報収集】 ・予想や仮説の検証に向けて調べる。 【考察・構想】 ・社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察する。 ・社会に見られる課題を把握して解決に向けて構想する。	公助 共助 自助 自助 → 共助 → 公助 自助 → 共助 → 公助 自助 → 共助 → 公助 自助 → 共助 → 公助
課題解決 【まとめ】 ・考察したことや構想したことをまとめる。	【学習課題1の課題解決案】 鹿児島県で起こりうる災害を想定して、公助・共助・自助の取組がされている。
新たな課題 【振り返り】 ・学習を振り返って考察する。 ・新たな問い(課題)を見出したり追究したりする。	【問い(学習課題2)】 身近に起こりうる災害を想定して、自分たちにできる防災を考えさせることを意図して... 自助を考えた。何が出来るだろう? 【学習課題2の課題解決案】 私たちにできることを、ふだんから取り組まなければ! みんなで協力しよう!

鹿児島県でも起こりうる災害を想定して、公助・共助・自助の取組がされていることを確認した後、身近に起こりうる災害を想定して、自分たちにできる防災を考えさせる新たな視点の「問い」（社会への関わり方を選択・判断させる視点）を設定している。

新たな視点の「問い」は、児童生徒の学習の履歴や他の単元等とのつながりによって、多様に構想できるものである。そして、この「問い」を教師が事前に構想しながらも、児童生徒が自らその「問い」を発見し、解決へ向かうような授業が展開できたならば、児童生徒は、社会科学習の更なる楽しさや本質的な学びに触れることができるであろう。

ー引用文献・参考文献ー

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』平成29年
- 澤井陽介著『見方・考え方「社会編」』平成29年、東洋館出版
- 大杉昭英著『アクティブ・ラーニング 授業改革のマスターキー』平成29年、明治図書
(教科教育研修課 中熊 信仁)

